

卯建の町並みを通り

馬ためしに登ってみよう

玖波宿と参勤交代

大名行列とは、大名が参勤交代の時、一定形式の隊列を整えて宿場に入る行列です。

玖波本陣洪量館に宿泊した大名は、その役柄や石高などにより着衣や行列の規模が違っていました。

文政2(1819)年編集された国郡誌玖波村には、町内370軒の戸数の内、

宿泊に割り当てられた家数は次のように記されています。

- 一 本陣1軒(洪量館)
- 一 一家来、同行者の宿泊185軒
- 一 荷運びの村人たちの宿泊40軒
- 一 各村役人の宿泊35軒
- 一 一人・馬引継役人の宿泊2軒

実に163軒にのぼり、町内の半数近い数を占めました。

大名行列の人数は、幕末頃の10万石の大名で、おおよそ240〜250人が標準でしたが、それに地元加勢者が従うと、その倍くらいの集団になりました。



卯建の町並み(版画)

○ 玖波の卯建の町並み

玖波宿の町並みは大半が長州の役の際に焼失したため、明治以降に再建されましたがこの卯建が多くみられます。

25 玖波の宿場跡

佐伯郡の西国街道は、寛永10(1633)年の幕府巡見使の派遣を契機に御茶屋が設けられ、同12年から制度化された参勤交代によって、大いにその整備が図られた。そして、「宿駅伝馬の制度」も次第に確立された。

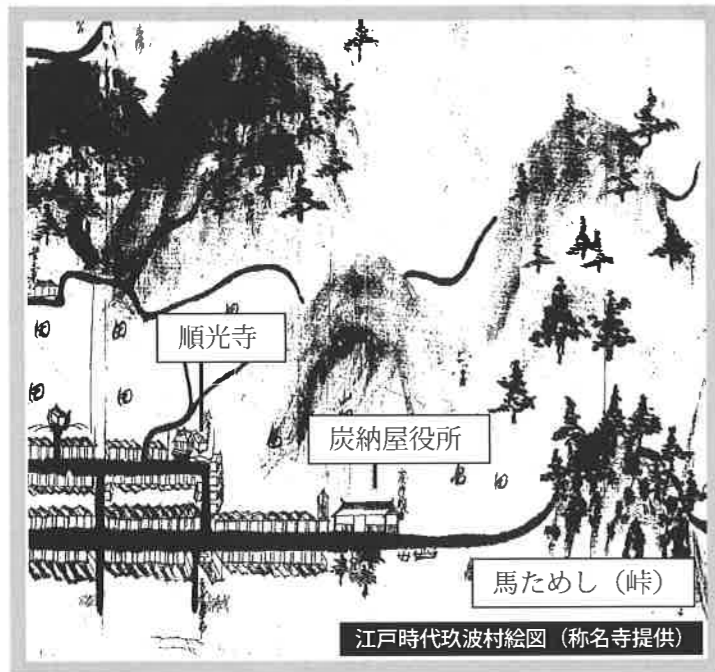
玖波宿には本陣(御茶屋)が置かれ、諸大名や幕府役人などの宿泊に当てられた。また、伝馬を常備して大名の参勤交代をはじめ、幕府の役人・諸大名・諸藩の要人などの公用交通の時に伝馬を提供することが義務付けられた。

玖波宿は、一般の旅行者の宿もあり、賑わいを見せていた。

また、近郷近在の村々から諸生産物の集積売却、人馬による駄賃稼ぎなどでも活況を呈していた。その上、文化情報伝達の拠点でもあった。

現在、玖波の町並みには、「卯建」(袖壁)をもつ町家が見られるほか、蚕を飼ったという「つし二階」もある。

また、「格子窓」が連なるその景観は、道行く人の心を和ませてくれる。



江戸時代玖波村絵図(称名寺提供)



馬ためし(峠)

27 馬ためし(峠)

広島以西の五大難路の一つで、1町20間(約145m)の急な坂道の峠である。

「軽尻」といって旅人が乗って、5貫目(18.75kg)までの手荷物しか積まない馬ならまだしも、40貫目(150kg)の荷物を積む「本馬」と呼ばれる馬には、この峠を超えるのが大変だったらしく、正に「馬だめし」であった。

26 炭納屋役所跡※

給主(領主)上田家は、佐伯郡北部にある、給地(領地)村の炭・板・諸材木を、栗栖村・中道村(現廿日市市)の炭納屋所を経て、玖波村・宮内村に積み出して、御用船で広島城下や、大坂に運び、売りさばっていた。これを上田家による山荷物の専売制という。

玖波の炭納屋役所は、寛永(1624~43年)の頃までであった上田家のもと米蔵だった所を使用していたが、寛政11(1799)年同所に炭納屋と役所を建てた。この建物は長州の役で焼失した。

